



親にはナイショの子作り性活

—甘原出雲編—

著 布施はるか
画 唯々月たすく
原作 アトリエかぐや



ぶちばら文庫

目次

プロローグ	背徳の自慰	5
第一章	壊れゆく日常	12
第二章	兄として、男として	44
第三章	禁断の一線	86
第四章	マニャック&フェティッシュ	122
第五章	次なるステージへ	188
エピローグ	禁断の愛の行き着く先は…	238

「本当に、好きにしていんだな？」
緊張のせいか、出雲が喉をゴクっ
と喉を鳴らした。そうして……。
「い、いいわよ？ そのために、こ
こに来たんだもの」
自ら兄の目の前で股を開く妹。秘裂
に喰い込む薄布を見せつけてる。
「好きにして♪」
「う、うおおおおおっ!!」

挨拶を交わす程度だった。だからだろうか。健矢を苛んでやまなかった自責の念や罪悪感はいしだいに影を潜め、代わりにドス黒い背徳の欲望が心を蝕んでいった。

出雲を抱きたい……。出雲を俺のモノにしたい……。そんな思いの丈を吐きだすかのうに、昨夜は自慰を繰り返してしまっただけだ。出雲の痴態を思い浮かべ、出雲が穿いていたショーツのぬくもりや匂いを思いだし、何度も、何度も……。けれど、そんなことで出雲への想いが満たされるはずもなく、却って想いを募らせる結果となっていた。

「出雲のヤツ……、俺を弄ぶつもりか……？」

悶々とした想いをかかえながら、職員室の自分の席に腰を下ろす。

「ん……？　なんだ、これは？」

机の上に通の茶封筒が置かれていた。自分で置いた覚えのないそれを手に取る。宛名も、差出人の名前もない。

「まさか……！」

健矢の脳裏に数日前の記憶が甦った。わななく指で封を開け、中から三つ折にされた一枚の紙を取り出す。そこには、手書きの文字でこう書かれていた。

今日は演劇部の活動はお休みな。

だから、前と同じように放課後、部室に来てね。

来なかったらどうなるか……、フフツツ、言わなくなつてわかるわよね？

読み終えた直後、健矢の背筋をゾクッと震えが駆け上がる。案の定、それは出雲からの脅迫……。いいや、招待状だった。すぐに健矢は背筋の震えの意味を悟る。それは期待あの続きができる。ようやく、この時が来た。出雲と完全に結ばれる、その瞬間が……。

健矢はチラリと時計を見た。前回と同じであれば、出雲が部室に姿を見せるのは放課後になってからきっかり1時間後である。そんなことを考えるだけで、健矢の股間は熱く滾り、ムクムクと膨らんでいくのだった。

それから健矢は、担任クラスの日直が来るのを待ち、提出された学級日誌を確認したりして時間を潰してから、勇んで腰を上げた。逸る心を抑えて学科棟の一角にある演劇部の部室を目指し、放課後になってからきっかり1時間後に室内へと踏み入る。

「クスクスッ。いらつしやい、兄さん」

部室の中では、すでに出雲が待っていた。兄の顔を見るなり、楽しそうに微笑んで小走りに駆け寄る。そのまま、健矢にギュッと抱きついた。

「あはあ……。兄さん……。兄さんの匂い……」

兄の胸に頬を当てて恍惚とした表情で感嘆の息をつく出雲。フワリと漂う髪の香りに混じって、ほのかな汗の匂いが健矢の鼻を掠めた。

「い、出雲……」

思わず妹を抱き締め返しかけ、けれど健矢はすんでのところで躊躇した。

兄としてではなく、ひとりの男として好きだと告白してくれた最愛の妹。そんな彼女へ手を伸ばせば難なく届き、拒まれることはない。望めば、その身体を確実に自分のモノにできる。だがしかし、果たしてそれでよいのだろうか？

「ああ、ずっとこうしなかった……。この数日、兄さんも辛かったと思うけど、わたしもたくさん我慢したのよ？　ずっと、兄さんにこうして甘えたかったんだから。どう？　そろそろわたしのこと……、犯したくて仕方なくなってきた頃だと思うけど？」

上目遣いで囁く妹の顔には、普段の表情と違う、堪らなく淫靡な微笑が浮かんでいた。

「ねえ、何回オナニーした？　わたしのムレムレパンツの感触と匂いを思いだしながら、何回オチ×ポを抜いて精液吐きだしたの？」

舌先でチロリと唇を濡らせて妖艶に見上げてくる。潤んだ瞳で見つめられるだけで理性が徐々に麻痺していくのを健矢は感じた。妹の体温、香り、体に触れる双丘の柔らかさ、甘い吐息、艶やかな唇、小悪魔の如き美しい瞳。そのすべてが健矢を惑わせようとする。

とはいえ、そのあまりにも露骨な妹の誘惑が、むしろ健矢の中の〈兄〉としての自覚を呼び起こした。散り散りになっていた理性を精いっぱい掻き集め、健矢は口を開く。

「く……！　い、出雲……、やめなさい……」

「あら……？　やめるって、何を？」

兄の反応は想定範囲内だと言わんばかりに出雲がクスクスと笑った。対する健矢は、

背徳の誘惑に煽られつつも、辛うじてグツと目をつぶり、邪な情欲に抗う。

「お……、お前の下着を使って、マスターベーションをしていたことは、謝る……。だからこれ以上、誘惑するのは、やめてくれ……」

そう言いながら出雲の身体から離れた健矢は、視線を伏せたまま説得を続けた。

「こんな関係を続けたら……、間違いない、やってくるのは悲劇だ！　俺は……、お前を不幸にしたくない。お前の幸せを奪いたくないんだっ！」

高ぶる感情そのままに、健矢は最後にはキッと睨みつけるかのように出雲を見つめ、叫んでいた。そんな兄の顔を出雲はしばらく微笑を浮かべて眺めていたが、やがてスッと健矢の傍らをすり抜ける。部室の扉に内側から鍵をかけ、クルリと振り返った。

「それで？」

「そ、それで……」

「兄さんが、わたしのことを不幸にしたくないというのはわかったわ。でもね、兄さん」

ゆつくりと出雲が歩み寄る。再び息がかかるほど近くに顔を寄せて囁いた。

「わたしが不幸かどうかは、わたし自身が決めることよ？　わたしは兄さんのすべてが欲しいの。手に入れたいの。ほかの誰にも、渡したくないの」

不意に、出雲の左手が健矢の腰へとまわった。ついビクリと身を竦めた隙に、今度は右手が健矢の股間を撫で始める。

「お、おい、出雲っ!? やめ……!」
「クスクスッ。硬くなってる。兄さんってば、あんなこと言いながらオチ×ポは勃起させているのね。説得力がないわよ?」

スーツのズボンを突き破らんばかりに勃起した肉棒を下から上へと撫でる出雲は、爪先立ちになって兄の耳もとで囁いた。

「心の底では、このオチ×ポで妹の処女マ×コ……、犯したいと思ってるんでしょ? 違う? それとも、兄さん以外のほかの男に、わたしが処女を捧げてもいいと思ってる? ねえ、どうなの? 早くわたしを兄さんのモノにしないと……、いつかほかの男のモノになっちゃうかもしれないわよ? それでもいいの? それこそ、兄さんにとっては最大の悲劇じゃない」

「ぐっ! そ、それは……」

反論の言葉も返せずに健矢は立ち尽くす。すると、出雲が首筋をレロリと舐め上げた。

「うくっ!? 出雲……!」

「んふふっ。兄さんの汗の味がする……♪ わかってたけど、まだつまらない考えに縛られているみたいね」

出雲がますます積極的に身体を密着させる。舌を伸ばして首筋をペロペロ舐め続ける。

「うあっ!? や、やめろ……、出雲……。お前こそ、考え直……。んぐっ!?」



肉棒を擦られ、首筋を舐められるたびに、健矢の体から力が抜けていった。今までずっと渴望してきた出雲の身体が、こんなにも近くにある。本能がこのまま流されることを求め、それに抗おうとする理性が悲鳴をあげる。

「考え直すことなんて、何もないわ……。わたしは兄さんが欲しい。そのためなら、なんだってする……。兄さんの好きなコト、したいコト……。なんだってさせてあげるよ」

言うが早いが出雲は、力の抜けた兄の体をよろめかせ、その場に押し倒した。

「くう!? 何をす……。る!? お、おい……。出雲、何して……。!? おい、やめろ……。!」

健矢は慌てて起き上がろうとする。けれど、その視界にパールグリーンの薄布に包まれた妹の股間が飛び込んできた。啞然とする兄の顔を跨ぎ、ゆっくりと腰を下ろしてくる。

「クスッ。兄さんって、わたしのパンツ大好きでしょ? だから今日は、穿いたまま直に味わわせてあげるわ」

大きく開かれた両腿。秘裂に喰い込み、くつきりと筋を浮かべたショーツ。股間が近くにつれて、スカートの中で淀む濃厚な汗と尿の匂いが鼻を衝く。健矢は説得を続けるためにも逃げようとするが、体が動かない。その視線は妹の股間に釘づけになっていた。

「んふふっ。今日は体育があったから、すっごく汗で蒸れてるはずよ? 触らなくてもわかるくらいパンツの中がヌルヌルしてるもの。それにね、今日は兄さんが喜ぶと思って、オシッコしたあと、拭いてないの。だからココ……。とつてもとつても、オシッコ臭いと

思うわ。ふふ。嬉しい? オチ×ボ、ガチガチになっちゃう? ほら、妹の汗とオシッコでムレムレのパンツ……。たっぷり嗅いで、気の済むまで味わって?」

次の瞬間、健矢の顔に出雲の豊かな尻が覆い被さる。

「んぶっ!? んん……。!」

ショーツに包まれた下腹部が顔に密着した。ちやうど、薄布のクロッチ部を鼻と口に押しつけた格好だ。しかも出雲は、挑発的な笑みを浮かべてクイクイと腰を左右に動かす。「クスクスッ。ほら……。遠慮しないで、兄さん。いつもみたく、獣みたいにクンクンって鼻を鳴らして匂いを嗅いでいいのよ?」

「んぶぶ……。! いっ、出雲……。!」

出雲が腰をくねらせるたび、股間のワレメにパールグリーンの生地が喰い込み、卑猥な皺を刻んだ。むろんそれは、健矢には見ることが叶わないものの、呼吸を確保しようと喘ぐ唇や鼻で辛うじて感じ取ることができた。

目の前に……。いいや、口と鼻に密着した位置に、何度夢想したかわからない妹の股間がある。何度自慰のオカズにしたか知れぬショーツが、穿いたままでそこにある。秘唇の隙間に喰い込む、ほんのり黄ばんだ股布から、汗の匂いと尿の香りが混じった醜えた臭気が漂ってきた。興奮を抑えきれぬ健矢を、さらなる高ぶりが揺さぶる。

「ほらほら。わたしの汗でヌルヌルになつてオマ×コ、パンツと一緒に味わって?」

ぶちばら文庫

はらハラしちゃう!!

甘原出雲編

2011年 11月25日 初版第1刷発行

■著 者 布施はるか
■イラスト 唯々月たすく
■原 作 アトリエかぐや

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをする事は、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©HARUKA FUSE ©2011 KaGuYa

Printed in Japan 2011

PP031

 ぶちばら文庫
creative

それでも 水着は 脱がさない!

Soredemo
Mizugi
Ha
Nugasanai!

好評発売中

偶然当たった沖縄旅行。憧れの水無瀬まどかにつきあい始め、幸せ絶頂だった康祐は、迷わず決意を固めた。この旅行中に、まどかと初エッチをするのだ。だが、行きの機内で出会った陽子に初体験を手伝ってもらったことで、ふたりの旅行は誘惑の連続になってしまった。意外と巨乳だったまどかの水着姿に感動しつつ、大人な陽子にも惹かれる康祐は、水着エッチの毎日!

ぶちばら文庫23
玉城琴也 著
珈琲貴族 画
定価 670円(税別)

真夏の天使たちよ…
脱いじゃダメ!
絶対!



姉はカバジョ 専属メイド

12月下旬
発売予定

ぶちばら文庫32
北原みのる 著
ピロ水 画
定価 670円(税込)

実の姉弟のように育ってきた、
博人と幼なじみの早百合。ある日、
彼女は両親の経営失敗によって
多額の借金を背負ってしまう。
それを肩代わりしたお礼として、
博人専属の家政婦となった早百
合だったが、お世話の方向が次
第にエッチな方向に…?



お姉ちゃんの愛で
あなたの毎日を完全サポート♪